

三年が過ぎた福島へ

2014年3月31日～4月2日

狛江の放射能を測る会 二階堂 まり

春休みを利用しての福島への旅も三回目。去年はほとんど線量が下がっておらず、むしろ上がっているところもあってショックだったが、三年たった今年はセシウム134の半減期が2.1年だし何もしなくても減ってはいるだろうという期待感があった。結果として、下がっているところは多かったがそうは言っても、低いところでも狛江市 ($0.06 \mu\text{Sv/h}$: マイクロシーベルト/時) とはひと桁違い、原発の被災地にきているのだなあということを実感せざるを得なかった。除染が済んでいるところでも、道路上は低い舗装された車道から一歩だけ脇に寄った草や土の上 (断らない限り地上1mで測定) はドンと線量が上がる。しかし、地元でマスクをしている人はほとんど目にしなかった。

< 美しい夜(よ)の森・富岡、そして檜葉 >

一日目、富岡のインターで、毎年お世話になる檜葉町宝鏡寺住職の早川さんに会い、富岡町を中心に案内していただく。彼は「ふるさとをかえせ・福島原発避難者訴訟」の代表をしている。また、3月9日の「原発ゼロ☆大統一行動」では日比谷野外音楽堂でお話をなさっている。インターを出てまもなく、田畑には放射性ゴミを入れるあの黒いフレコンバッグが並んでいる。汚染土だけでなく、セイタカアワダチソウを刈って入れてあるのだそうだ。ちょっと先に福島第二原発の排気筒が見える。町役場の広報車が「立ち入りは3時までです。バリケード(検問所)も閉まります」とアナウンスをしている。常磐線の夜(よ)の森駅を下に見下ろすところに立つと、桜の木がず〜っと並んでいる。蕾はまだ固いが、とてもしっかりした木だ。何世代にも渡って大切に育ててきた桜の木……。町の人たちの歓びであり誇りだった夜の森の2.5キロに及ぶ500本のソメイヨシノの桜並木は、去年より少しだけ先まで行けるようになっているが一番美しいところは帰還困難区域でまだまだ先の方だ。道路は除染されているが、駅を見下ろす柵のところは掻き出した枯れ草と土がこんもりと積んであり、モグラの出口のような感じだ。そこは $8.8 \mu\text{Sv/h}$ ある！去年初めて来たときに心を締めつけられた可愛いケーキ屋さん



富岡ICを降りて、夜の森に向かう途中。富岡町でも除染が始まっている。富岡IC出口で $3.43 \mu\text{Sv/h}$ 、道路で $2.6 \mu\text{Sv/h}$ (以下、 Sv/h を略す)



夜の森の桜並木。自宅に帰ってきている人と出会った。横田菓子店前から撮影。路上で $3.0 \mu\text{Sv/h}$ 、脇で $4.7 \mu\text{Sv/h}$ 、雨どい下で振り切れた ($10 \mu\text{Sv/h}$ 以上)。

「お菓子のよこた」のところに行く。ガラスに貼られた「ホワイトデー」の貼り紙は少し色褪せてそのままだ・・・中を覗くと可愛らしい箱や包装されたお菓子が変わらずそこにある。時間が止まっている。前回同様、裏のトイレのところは線量計が振り切れる（10 μ Sv/h 以上）。道路をへだててピンクのきれいな色のクリニック・調剤薬局・・・看板も新しげに優しい感じで明るい日差しの中にある。開院まもなくだったのでだろうか・・・。

バリケードの向こう側のアパートの屋根のそこそこにビニールが被せてありその上に白い砂袋のようなものが乗せてある。地震で壊れたところから雨漏りしないようにとやっけてあるのだそうだ。しかし、もう時がたち、役目を果たしていないということだ。この雨漏り対策はこのあとあちこちで目にするようになる。白い木蓮、黄水仙、ピンクの花々・・・動けない花たちは春の訪れで確実に美しく咲いている。新しい家が多く、さぞ無念だろうと思う。夜の森にある富岡第二小学校のモニタリングポストのところはしっかり除染されているので低くなっているが、ものの 20m くらい離れた所とは 2 μ Sv/h も違った。しかもモニタリングポストに出ている数字と我々の 3 台の測定器とではかなり数値が違う。これはどのモニタリングポストも同じだったし、去年もそうだった。「たらちね（いわき放射能市民測定室）」（7 頁参照）で聞くと、「大体半分くらいになってますよ」とのこと。

以前に請負業者がフランスの放送局からのインタビューに答えて「国から圧力があるので操作するのはです。高く出ると国からクレームが出るのです。」と喋っていたとのことだ。低く出るのに取り変えたがまだ撤去が終わってないところは二台並んでいるそうだ。確かにそういうところもありました！ 富岡第一小学校の体育館は中の紅白幕が透けて見えている。卒業式だったのでだろうか。広い広い運動場・・・。

ここで思いっきり走りまわっていた子どもたちが仮設でどうしているのだろうか。また広報車が通る。「防災富岡広報で



夜の森の桜並木から一本離れた通り沿いにある脳外科医院「さくらクリニック」。薬局も傍にある。桜色の壁の真新しさが悲しみを誘う。



右側の崖下がいまは走っていない常磐線の夜の森駅。桜並木から掻きだされた土や落ち葉をフレコンバックに詰め込む。8.8 μ ある。



夜の森のバリケードの先(帰還困難区域)にあった家の屋根。雨漏り用の補修が痛々しい。手前の信号は赤のまま。バリケード前は 2.10 μ



富岡 2 小のモニタリングポスト(以後 MP と略)の前で測定 2.57 μ 、MP1.60 μ 、校門前で測定すると 4.34 μ 。

す。被曝制限のために着用した防護装備については、放射性物質拡散を防止するため、必ず帰りのスクリーニング場で処分するようお願いいたします

す」・・・最後に富岡駅へ。去年より更に廃墟感がある。今回はお天気がよいので打ち付ける白波がなおさら悲しい。あの美しい海は変わらない・・・海には罪はない・・・

檜葉町に入る。去年も思ったが、本当に美しい町！山・里・川・・・見るのが辛いほど美しい。日本人の心のふるさとだろう。そしてそこには一面のフレコンバッグが。早川住職は自分の田畑を放射性廃棄物の入ったフレコンバッグの仮置き場として三年間の約束（無理だが・・・）で提供しているが、去年はある部分にズラ〜と並んでいるという感じだった。今年は・・・それが何段重ねにもなって田畑を何面も埋め尽くし、その上に緑色のシートをブワ〜と被せてある。横ではクレーンがさらなる黒バッグを重ねている。檜葉町はこの春に帰還の事を決めるそうだが、この風景の中に帰還するのだろうか・・・。高台の宝鏡寺は相変わらず美しく春に調和している。次々に色とりどりの花が咲くように先祖代々種々の木を植えて育てて来ていたそうだ。立派な桜の木は、手入れができないため「テングス病」にかかっているとのこと。先の方の枝がくっついてきてしまっているのだ。そこをきちんと切ってやらねばならないのに・・・。800年近い歴史のあるお寺の30代目の住職は孫が継ぐ予定だった寺を自分の代で一度閉めざるを得ない。

< 浜通り医療生協・・・(1) 原発集団訴訟 >

理事長の伊東達也氏に一年ぶりにお会いして三年たった福島の実況と裁判の状況を伺った。伊東さんは「元の生活を返せ・原発事故被害いわき訴訟」の団長をしている。檜葉の早川さんが団長をする訴訟と共に福島地裁いわき支部が扱っている訴訟だ。二つの違いは以下の通りだ。早川さんの「ふるさと・・・」は「強制避難を余儀なくされた人々は生活手段を奪われ、人生設計を根本から狂わせられており、その裁判は生活再建という今後の人生を掛けた裁判」であり、伊東さんの「元の生活・・・」は「被害者の健康に対する不安の声などを全く聴かず、僅かばかりの一時金額を通知して終わりにしようとしている東電と政府に対し、賠償金だけでなく、特に子どもたちの将来のために基金制度（東電・原発メーカー・原発ゼネコン・債権を持つ銀行などが拠出）の創設など種々の政策（後述）を求める政策形成訴訟」である。一緒にやりたいが、「ふるさと・・・」の方は避難者たちが「今」困っているため、長引く国への訴えはやめて東電だけを訴えることにした。弁護団は共通だそうだ。被害の内容が「生活破壊」「ふるさと喪失」であり、金に換算するのはとても難しい。800年続いた寺を失う早川住職の痛みなどをど



富岡保育所。昨年と比べて、富岡町の荒廃を感じたが、早川さんは除染が始まり、ゼオライトが撒かれると檜葉のように一変するよと言う。



檜葉町。早川さんの田んぼを含め、一面フレコンバックが山積みの仮置き場。0.39μ



今年も富岡町の案内をお願いした早川篤雄住職(真中)。宝鏡寺本堂前で。0.44μ

う評価するのだろうか。「元の生活・・・」の方は低線量被曝が大きな問題となるが、一次・二次提訴を合わせて1395人が原告となっている。この中には222人の子どもが含まれている！！その内15人は原発事故の時にはまだお腹の中にいて3.11以降に生まれた子どもたちだ！！！！こんな裁判があつていいのだろうか・・・。まさに「放射能特有」の問題だ・・・。集団訴訟は13の地裁で行われているが、東電は「津波・地震は想定外であり、東電には不法行為や故意責任はない」「しかし賠償は法律で無過失でも支払うようになっているので、中間指針に従って払う。無過失で賠償するんだから不法行為責任の審理は不要」「『年間20ミリ被曝する』方が、『喫煙・肥満・野菜不足などの発がん要因によるもの』よりも発がんリスクは小さい」と答弁している！！！！信じられますか?!?!?! 「不法行為」とは、「故意または過失によって他人の人権を侵害し、損害を与えること」だが、それが無いと?!?!?! この答弁に対し国は認否せず高みの見物だそうだ。結局はその東電の言い分を認めるのだろうかと言っていた。伊東さんは言っていた。低線量被曝の不安・問題点についてどう訴え、理解してもらうかだが、裁判長は「国が～～と言っているから」「素人が何を言う？」になりがちだという。驚いたことに、裁判官に現地を見に行つてほしいといくら要請しても、あれこれ巧い言葉を使って断り、行くつもりはないのだという。伊東さんも早川さんもず～～と以前から原発の危険性を訴えてきた。2005年には、検証の結果1960年のチリ津波と同じ津波が起こったら福島原発はポンプが水没し大変な事故になることを突き止め、二度にわたって東電に警告し、東電もそれを認めたがそんなものは来ないことにしてしまったそうだ。

「元の生活・・・」訴訟の論点は4つで

① 放射線による低線量被ばくの健康診断、検査、医療の継続的な補償

去年12月31日までに一次検査を受けた約25万4千人の内、癌と確定が33人、疑いが41人だが、県民健康管理調査検討委員会は「原発との因果関係があるとは考えにくい」と話した。この委員会は正式な検討会開催の直前に秘密の会合を持ったことが発覚して信頼を失った。現在は委員会のもとに「甲状腺評価部会」がつくられ8月に見解を発表するが、発表がどうであっても、「原因は何だ?！」と論争して県民対立をあおらないように、違いは認め合つて団結して国と東電に向かわねばならないとのお話だった。分断・分裂してしまえば相手の思う壺だ。福島の色々な問題でそれを強く感じる。

② いわれなき偏見による差別を広げないための学校・社会教育

③ 原発労働者の労働条件の改善

多重下請け構造のためピンハネ率90%近いところもあるという。労働者は「被害があつても訴えない」「報道機関からの取材は受けない」の念書を書かされ、破ると雇用会社そのものが切られたりする。被曝した労働者も多く、熟練労働者が激減。事故「収束宣言」後に働き始めた作業員には検診と精密検査の補助はなくなっているようだ。

④ 県内10基の廃炉は福島県再建の大前提

< (2) 3年後の現状 >

1) 誰も住んでいない避難区域の面積は 1150平方キロで香川県・大阪府の6割、東京の半分の広さ。



浜通り医療生協で、伊東達也理事長(右から2人目)から3年経つた福島の現状を聞いた。

- 2) 避難者は163,000人から135,000人に減ったが、家族そろって住める家もなく所帯数は3割も増えている！！つまりバラバラに暮らしているわけだ。浪江町ではだんだん増えて今では6~7割がバラバラに暮らしていると回答しているようだ。
- 3) 去年12月に震災関連死と呼ばれる死亡者が直接死(1603名)を超えたが、今日(2014.3.31)現在1691名と言われている。しかし、認定に差がありしっかり医師が助けて申請させているところは認定率が高いが、家族だけではやり方が分からなかったりするため認定率が80%~30%とばらついているとのこと。しっかりした基準がないのだ。実際はもっと多いだろうという。
- 4) 子どもは学校を奪われ、先生・友人・そして家族からも引き離されたままだ。浪江町で1700人の小中学生にアンケートした結果、県外の690校に分散している。2012年1月の調査では「元の家族が揃っていない」が51%だった。もっと増えているだろう。他の町では把握されていないが同じようなものだろうという。県立八つの高校はすべてが他の市町に避難してサテライト方式で仮校舎での授業を続けているが、このほど中高一貫校を広野町に作る計画が決まって、それと引き換えに5校が2017年から休校になるそうだ。いつ復活できるのか誰にも分からない。「廃校」ではなく「休校」にしているのは政治的思惑があるようだ。第一原発から22キロの私立高校(原町)は生徒減少と東電が移設費用の賠償を認めないため2013年度で廃校。私立大8校は大幅な入学者減だが東電は求めに対して無回答！政府は倒産されるとまずいため国の予算で支援する。あくまでも「損害賠償」にはさせないのだ。
- 5) 県内大部分は人工放射能にさらされて多くの県民が苦しみと不安ストレスの中で生活。加えて地域社会が「原発からの距離」「放射線量」「賠償」で分断され、「津波被害 vs 原発被害」の違いなど県民の中に対立が持ち込まれ、うっ憤が同じ被害者に向けられてしまう悲しみがある。これは去年も耳にしたが、年を経てもますます複雑になってしまっているようだ。

< オーガニックコットン >

NPO ザ・ピープルの代表で復興支援ボランティアセンターの長でもある吉田恵美子さんからの電話の声は物凄く明るく元気でエネルギーに溢れていてこちらも元気になった。小名浜地区のボランティアセンターに行く途中で道を確認しようと連絡したときのことだ。プレハブの事務室に所狭しと並ぶコットンベイク人形や各地から戻って来たコットン、コットンを組み直してブーケの芯にするワイヤーのついたコットン……。平成24年の初年度は技術がなくて、綿繰(紡績工場へ送る状態にする)後のものはかなり少なかったが、25年度は280キロもできたそうだ。口に入れられない農作物として放射能の移行率の低いコットンを有機で作ろうと始めた事業だ。仮設の脇でも土いじりできる良さもあり、やっているという話を去年は聞いたが、今では小学校8、中学2、高校1でも教育の一環として参加しているそうだ。子どもたちが育て、日誌をつけ、人形を作り、環境や産業についても考える。広野、二本松、南相馬・・・そして県外にも広がって来た。首都圏などから多くのボランティアが参加している。双葉にも広げていきたいと。それは帰還した人たちにやってほしいということだけではなく、ボランティアの人たちにそちらにも行ってほしい、そして見て、本当の情報



小名浜復興ボランティアセンターで。NPO ザ・ピープルの吉田恵美子理事長にますます複雑化する避難者・被災者のコミュニティ活動を伺う。

写真はコットンプロジェクトのポスターを掲げる二階堂。

を得て、理解してほしいからだ。そうやって風化を防ぎたいと。土や綿のベクレルチェックは「たらちね」できちんとしているが、やはり色々な意見はある。ボランティアで広野に来た人が空間線量を測り「0.24 あった（政府の除染基準は 0.23）が、その辺をわかってボランティアを入れているのか?!」と言ってきたこともあるそうだ。作る側は安全と想着いても買う側の立場、感じ方、考え方もある。そこをきちんと考えて進めていきたいと。現在は、布、糸、Tシャツ、手ぬぐいを販売している。それにブーケの芯にするワイヤー付き丸いコットンも箱に一杯置いてあった。

< いわきに住む人々 >

ザ・ピープルの事務所のある小名浜のタウンモールには「小名浜交流サロン」があるが他にも3つの常設の交流サロンがあり、常磐では温泉旅館のロビーを借りて月2回交流サロンをやるそうだ。同じ地区から避難してきている方たちが気兼ねなくお喋りしたり趣味を楽しんだり、健康や就職の相談をしたりする。去年、いわき市民と避難者との軋轢の話を伺い「避難者帰れ」の落書きの事など心を痛めたが、その対立が「有名」になってからは表沙汰はなくなったが内側へ内側へと入ってきている状況もあると。もうここで暮らそうと腹を決めた人と、とりあえず賠償が続く限りここにしようという人など、考えや決断の違いがさらにはっきりしてきて、ここでも避難者の中の分裂・分断が進んでいる。受け入れる側にも様々な分断がある。飲食店は「超」繁盛で働き手の方が足りないそうだ。だが住むところが定まらない、すべてが定まらない人が多く、自給 1000 円と言っても集まらないそうだ。富岡町の人たちがかなりまとまって郡山に住んで「お互いさま工房」というのを作っていたが、始め 30 人いたのが今は 5 名になった。多くの人がいわきへ来てしまったのだ。線量が低いということと東電に通えるということ。このように3年たってもまだまだ定まらないことばかりだ。いわき市は津波被災者の市民のためにやっと「いわき市津波災害公営住宅入居開始」を始めた。競争率は5倍で、なかなか希望のところうまく入れなかったり、すんなりいっていないという。もうひとつ、県立の避難者公営住宅も計画されているが、各町が入り乱れる上、いわき市の公営住宅と近いので、コミュニティがうまく機能するのか、地域住民とのつながりがうまくいくのかが心配。その辺を、ボランティアセンターにうまくやってほしいと委託されているのだそうだ。行政は作るどころまでやってあとはよろしくと・・・。大変な仕事だが、行政はそういうことが苦手だからなんとか知恵を出してうまくやってほしい。応援したい。前に進んでいくためには次から次へと新しい問題が出てくるのだなあと思つて改めて思った。

ザ・ピープルはこうした支援活動が評価され、市民功労賞を受賞した。

< 水俣に学ぶ >

2012年夏に いわき市の中高生が水俣研修に行った話を聞き頼もしく思つたが、引き続き2013年も夏に16名の生徒たちが6日間行ったそうで、立派な報告書ができていた。一年目は中心になった澤井校長の中学校とその卒業生だったが、今回は8校に広がり中学4、高校4。そのあとでフィリピンを大型台風が襲って大きな被害が出た時に、研修参加者たちは、立ち上がり街頭に立って募金を募り、救援用にと学校を通して夏物衣料の提供を呼びかけたそうだ。今年になって開かれた「三年目にあたって考えよう」というシンポジウムにも彼らは出てきて色々な立場の人たちの意見に耳を傾けていたようだ。水俣の方たちからは「私たちはもやい直しをスタートするのに40年かかった。皆さんはそれに比べたら早い！」といわれたそうだ。「もやい直し」とは水俣病の被害者たちが提唱した造語だ。「もやう」とは船と船をつなぎ合わせることで「ばらばらになってしまった心のきずなをもう一度つなぎあわせる」という意味だ。若者たちはきっと色々なことを学んだに違いない。素晴らしい！

< いわき放射能市民測定室「たらちね」 >

事務局長の鈴木薫さんも3月9日の日比谷野音で被災地からの訴えを話した一人だ。その中で「今後、30年、40年と事故の収束を担うのは、事故になんのかかわりも持たない子どもたちです。・・・多くのおとなたちが、子どもを本気で守るために立ち上がってほしい」と言っている。

今、「たらちね」がやっているのは以前と同じ「食料・土の測定」「ホールボディ・カウンター（HBC）での人体の被曝量の測定」「甲状腺検査」「球美（くみ）の里・子ども保養プロジェクト」の他に、① HBCの定期検診（まずはスタッフと理事などでスタート）② 専門家による講演会（福島では少ないそうだ。年に10～12回行う）③ 情報を英語・仏語でもアップ（独語もまもなく）④ 「チームママベク 子どもの環境をまもりたい」をサポートし学校の測定もアップ ⑤ 砂浜の測定・日本各地の海開きの情報を集め、砂浜の汚染度を比較している。いわき市の浜は桁違いに線量が高いそうだ。数百～数千ベクレル出る?!!!!!



いわき放射能市民測定室たらちねで、鈴木薫事務局長(右から2人目)にさらに多彩になった支援活動を聞いた。

でも確かいわき市の四倉海水浴場は海開きしましたよね？楽しそうな写真を見た覚えが・・・？地元の商工会議所などの圧力がかかったのだろうという話だった・・・。子どもはどこ？どこに位置付けられているのだろう？砂を測るときは表層・二層目・三層目…と別々にやるそうだが、始めは表層の線量が高かった。それから三層目が高くなったが今また表層が高い。海から汚染が来ているのだろうと。

< 甲状腺の検査 >

以前からやっている甲状腺の検査で、2013.4.1～12.31で3000人を検査。宣伝はHPだけだと難しい（福島はインターネットの普及率が30%程度）ので折り込みをするそうだ。今年は4500人を目標にしている。子どもは無料、大人は協力費として1000円徴収。福島医大での検査との違いは、医大は技師が検査をしてABCのどの判定かだけを告げ、次の検査は2年後、5年後。説明はしてはいけない。まあ、まあ、検査をするのが技師では説明もできないだろうし、医師がしたとしても答えてはいけないことになっている。「たらちね」では写真と一緒に見ながら説明をする。次は半年から1年後だ。医大で癌と言われてセカンドオピニオンを聞きに来る患者もいるそうだ。お母さんたちは汚染地帯で子育てすることからくるストレスが溜まる。子育て支援といったものがなく、メンタル面で大変な状態になっている。子どもたちは親のストレスに気を遣う。仮設では音の問題も大きい。児童の虐待が二倍に増えているそうだ・・・。

< 避難指示が解除された地域は今・・・(1) 広野町・川内村 >

いわき市の北側で檜葉町との境にJヴィレッジのある広野町は2012年4月に早くも避難解除され、1回目に行った二年前はタクシーの運転手さんが「戻れなかったって戻れないよ。生活できない。仕事もないし。お年寄りも帰りたいて言ったって、農業ができないからやることない。」と言っていたのだが、今は「賑わっている」と聞き予定を変更して寄ることにした。向かう途中は美しい海岸線が続く。広野町に近い波立海岸近くの家では幼児と犬を連れてお母さんが庭に出ている。道路沿いで測ると0.4μSv/hある。砂浜の線量は高いと聞いたばかりで不安・・・。マスクもしていない。いいお天気なので家々のベランダには布団が干してある。広野に入るとすぐ畑の除染に出会う。

回転する草刈り機が回り、畑の端っこだ「普通の」おばさんたちが熊手みたいなものでそれを掻き出している。一生懸命やっている横で私が線量を測るのがなんか気まずい気がした。内輪で「ホントに大丈夫なの？」などと聞きにくいのがわかる気がした。その先の畑の向こうは海岸で、防波堤が津波のために一部すっかり壊れている。機械で田んぼの U 字溝を作っていた。主要道路に出ると工事の車がたくさん通り、コンビニには車がいっぱい止まっている。5000 人の町民の中で戻ってきているのはまだ 2 割の 1000 人程度。代わりに 3000~4000 人がプレハブの宿舎や町民から借り上げたアパートなどに住んで除染や廃炉作業をしているのだそうだ。だから「賑やか」なのだ。辺りは $0.36 \mu\text{Sv/h}$ くらいだった。道路脇にずらっと桜の苗が植えてありメッセージが付けてある。「30 年後のボクへ」という 11 歳の子や、北海道に避難している子からとか。建物に掲げた看板には「東北に春を告げるまち 広野」と書かれている。明るい未来が来るようにと祈る。そのあと、富岡町から川内村を通過して田村市に向かう。川内村はイワナの里であり、山菜の宝庫であり、川に沿った本当に美しい村だが、ほとんど人は見かけなかった。

< (2) 田村市都路地区・大熊町 >

4 月 1 日（まさに今日！）避難指示区域だった 20 キロ圏内の都路地区が指示解除され、田村市は全市が解除された。ちょうど 20 キロぎりぎりの小高くなったところに CLOSED と書かれた「結」のレストランがあり、そこに来た板前のおじいさんと話げできた。そこには今度ファミリーマートができるので「結」は下の向こうに見える新しい商業施設に移動して、みんなの作ったものなどを持ってきて売り食堂もやるのだそうだ。その横に目新しい小学校・中学校・幼稚園の建物が見える。震災後に復興支援費で新築。4 月からオープンしたのだそうだ。入学式がまもなく行われるが「小学校に帰ってくるのは 10 人くらいかねえ」と。「除染したんだがまたダメになって今もう一度やってる。台風なんかくればまたダメになるんだよ。金の無駄だね。その金をみんなに分けてくれた方がいいのに」 子どもたちは仮設からマイクロバスで通ってくることになる。「娘たちは戻ってこないよ。うちはその下のところだけど家の中で 0.5 あるから住めないね」と。仮設から板前をしに通ってくるのだそうだ。「イワナ、ヤマメ、キノコ、山菜・・・みんなダメになった。ウナギは 20,000 ベクレルだよ。タラの芽は 8,000 ベクレルだからね。ちょっとなら平気かな（笑）」

今日からはこの先 数キロくらい、大熊町の検問所まで行けるので行ってみることにする。山道を進む。両側の平地は少なく民家は道路沿いに点在している。背の高い木々が両側に生い茂っていていかにも「放射能がいっぱい！」という感じで緊張する。大熊町に入ってしばらく行くと検問所のバリケードがある。その先は帰還困難区域だ。そこでの線量は 1.13（脇の土では 1.5）だ。バリケードのすぐ手前に簡易スクリーニング所があり、帰還困難区域から出てきた人を調べるが、水が



広野町桜田。真新しいマンションが建つ。除染や廃炉作業の作業員を当て込んでいるのだろうか。交通量も昨年に比較して格段に増える。



399 号線と 288 号線（都路街道）の合流点から、新しくできた商業施設（中央）と古道小学校（左）を望む。手前が 399 号線。

ないので、もし引っ掛かれば第2原発のスクリーニング所まで戻すのだそうだ。線量はそれほどではなく 0.36 くらいだった。もちろん、帰還を急ぐために必死で除染した結果の値だ。雨や風で両側の山からまた放射能が流れ落ちてくるのではないだろうか？その時にはすぐにまた除染するのだろうか？

< 果樹園のご主人と >

飯坂に泊まり、飯館村までの 399 号線での測定を開始。まず去年と同じ果樹園のところで測ろうとすると男性が近寄って来た。趣旨を説明すると色々話してくれた。大塚さん。我々と同じ団塊の世代だ。リンゴと桃を植えていて、自分の代から夫婦で 40 年かけて育ててきているそうだ。去年は 0.5 あったが今回は 0.25 程度に下がっている。「ゼオライトを撒けていわれたけど、ここは山全体がゼオライトなんだよね。始めは福島のゼオライトは買わないと行ってたけど、結局は使って、みんな持っていくから自分たちのところは足りずに島根から買ってたんだよ（笑）」「リンゴや桃は調べてもらったけどみんな大丈夫だった（リンゴ・桃は放射能をあまり吸収しない。柑橘類が吸収しやすい）けど、椎茸やナメコなんかは食べられない。楽しんでたのに。桜やブナを植えて楽しみがあったのに、みんなダメになった。補償はないんだよね・・・」「土の上の方 10 センチくらいを剥がして取るというけど冗談じゃない。10 センチが命なんだ。ここまで土を作るのに何十年かかったと思ってるんだ！」そして知り合いの除染の人たちの話をしてくれた。「手当が上がっていいねというのと、全然！っていうんだ。みんな上の方がピンハネしてしまう。除染のところの旗振りの人なんて 1 日 6000 円だってよ」

< 伊達市から飯館村へ >

伊達市に入ると田畑が耕されていて普通に帰ってきているのだなという印象を受ける。霊山町では、線量が去年の 0.8 から 0.6 に下がってはいるが、それでも高い！

飯館村に入ると去年より殺伐としている感じがする。碑が崩れていたり丸い石碑に汚れた線が入っていたり・・・。中心部に向かっていく。除染は「テスト除染」を終えた段階だと聞いていたのでまだほんの少しかと思っていたら、フレコンバッグも山積みになりショベルカーもそこここに。「大成・熊谷・東急 JV (ジョイントベンチャー)」と書かれた車が往き来する。JV は普通は大きい会社が小さい会社と組むということだが、ここで



田村市都路と大熊町の境。看板に「はつらつ高原都市」とある。後方の親子クマの看板は「フルーツの香るロマンの里 大熊町へようこそ」。0.55 μ



伊達市に入の手前の 399 号線沿いのリンゴと桃を栽培している農家さん。気さくで、いろいろと話をしてくれた。0.23 μ



伊達市保原体育館前のモニタリングポスト。たちねで話のあった2台のポスト。唯一、われわれの測定値とそう違わなかった。0.25 μ 。MP:0.20

はしっかり大手が儲ける仕組みに。信号近くの工場にはたくさんの車が止まっていて人もいて活況を呈している。ハヤシ製作所。若い社長は「震災からず〜っとここで仕事をしてカメラのレンズ部品などを作っている。放射能？しょうがないじゃないですか。ラインもあるし、動かすことはできないんだから。」みんなマスクもしていない・・・ 臼石地区の中心あたりでは飯場があり、除染の機材や車がいっぱい！修理工場もオープンしている。荒れ果てた野原とのちぐはぐ感を禁じ得なかった。

少し上った「赤石沢遺跡入口」付近で車を降りると、なんと、去年遊んだ黒いワンちゃんが駆け寄ってくる！！お腹を上にしてゴロニャン（ゴロワンか...）の態勢。飛びついたり跳ねたりしばらく遊ぶ。縁側に座っていたおじいちゃんも健在！手を振る。住んではいけない地域だけど、チェルノブイリでも 26 人が残ったように自分で決めて住んでいられるのではないかしら。家の裏の墓地の横にはフレコンバッグが山積み。

村役場に行く。明るく瀟洒な建物がいくつもある。役場の周りに老人ホーム、公民館的な建物（全村見守り隊が使っている）、他にも木でできたロッジ風なものもいくつか。全体で優しく調和して「までいな」場、空間を作ろうとしていたのだろうと感じられる。映画にも出てきた「ほんの森いいたて」は子どもたちが本と親しみ、本が好きになるようにと若い女性がオープンしたすてきなお店だが、今は復興のための事務に使われているようだ。これから本格的な除染が始まるとのことで多くの人が活動していた。あの豊かな森や畑、沼などを見ると本当に除染ができるのだろうかと不安になるのだが・・・

特別養護老人ホーム「いいたてホーム」を覗くと玄関に「ご面会の方は・・・」と貼ってある。え？まさか誰も住んではないよね？と思ったが、中には生活感がある。思い切って入って受付で尋ねる。なんと震災からず〜っとここで生活が営まれているのだ。元は 100 名くらいだったが今も約 60 名の方が住んでいる。職員は全員通いだそう。若い女性の看護師さんたちがあの直後から覚悟を決めて働きに来ていたのだ。そのようなことを知っている人はどのくらいいるのだろうか？

< 検問所で >

飯館村から浪江町に入る展望台手前にバリケード（検問所）があり、そこからは進めない。2 年前は何も規制がなく浪江から葛尾村に抜けることができた。あの時は浪江町に入ってすぐの赤宇木（あこうぎ）では車の中で線量計の針が振



赤石沢遺跡入口の看板前で。測定していると昨年と同じ犬が喜び勇んでやってきた。2.43 μ 。



飯館村役場。周辺には市の様々な施設、活性化センター、老人施設、本の森いいたて、病院が集中して建設されていた。まだ、建設されて間もないものが多かった。



飯館村役場と道路を挟んで特養老人ホームがある。60 名の方が生活を続けている。こここの広場で見守り隊の出陣式に出くわした。多くの人が集まっていた。1.69 μ

り切れてとても怖かった。去年からは通れない。そこで警備をしている男性と話す。始めは「何者だ?!」という顔で見られたが趣旨を話すと色々話してくれた。「観光バスでやってきて、『わ～大変ね～』と大騒ぎをする人たちもいるんですよ。全く他人事で、とても腹が立つよ。1日8時間ここにいるんだけど、大体30(μ Sv/h)だったね(一日で浴びる量が)、前は。今は少し減ったけど。冬は雪だと低くていいんだ。1年に13mSvだよ。年とってるからいいけど、あんまり浴びると孫を抱けなくなるからね・・・」「食事はその(物置のような小さなプレハブの)小屋で取るのですか?」と尋ねると「うん、セシウム弁当だよ」と笑いながら答えてくれた。



展望広場手前の検問所で、仮設住宅から通っている掛りの方から話を聴く。冬は雪が降り下がるが、年13mSvを被ばくすると言う。脇にある小屋での昼食をセシウム弁当と笑う。4.71 μ

< 未来へ >

東京で福島の方に会うと決まって「東京に来ると、あのことはあたかもなかったかのような空気をを感じる」「東京の人はもうすっかり忘れていいのか」と言われて心が痛む。首相が「収束宣言」をしたり、「汚染水はブロックされている」「健康の被害は今までもこれからはない」

「東京は福島とは250キロ離れているから安全です」などと平気で言う国だ。今回の旅で、3年という歳月が流れても根本は何も変わっていないという思いを強くした。そして、前の二回の旅と一番違ったのは、ものすごくモヤモヤした気持ちが残ったということかもしれない。「福島どうだった?」と聞かれて、何と答えていいのかわからない物凄くおかしな、チグハグなというか・・・そんな気持ちなのだ。被災地では、いったい誰のことを考え、何を大切にしているのだろうか? どこへ向けて進んでいるのだろうか? 多分それは今この国全体が抱えている問題なのだろう。目先のこと、経済のこと、そればかり考えて本当の未来のこと、ビジョンがないからなのではないか。上に立つ人たちが福島を忘れようとしても、そっぽを向いても、忘れさせようとしても、私たちは絶対に忘れないようにしたい。周りが見えていないとすぐに忘れがちな私たちは努力するしかない。こんな事態を止められなかった私たち大人には、子どもたちがこれから生きていく世界に対して出来る限りのことをする責任がある・・・と改めて考えさせられた旅だった。行く先々で色々なことを話して下さった方たちに心から感謝したい。そして諦めずにみんなで智恵を出し合っていきたい。

399号線・富岡町他、放射能年時変化調査結果(2012~2014)単位 μ Sv/h

